

第2部

1. 方法論、デカルトの思索

デカルトが自分の学問への決心を固めた頃、彼は30年戦争に従軍してドイツにいました。皇帝フェルディナント2世の戴冠式を見物したあと、バイエルン公の旧教軍に戻ろうとした時には冬に入っており、ドナウ河畔のノイブルグの冬営地に足留めされてしまったのです。

そこでは気を散らす付き合いもなく、心を乱す心配事や情念の湧くことも無かったので、彼は一日中一人きりで炉部屋にこもって心ゆくまで思索にふけていました。そんな環境の下で思索したことを、デカルトは次のように語っています。

書物の学問、少なくともその論拠が蓋然的なだけで何の証明もなく、多くの異なった人びとの意見が寄せ集められて、しだいにかさを増やしてきたような学問は、一人の良識ある人間が目前にあることについて自然に（生まれながらに）なしうる単純な推論ほどには、真理に接近できない。

われわれはみな、大人になる前は子供だったのであり、いろいろな欲求や教師たちに長いこと引き回されねばならなかった。しかもそれらの欲求や教師は、しばしば互いに矛盾し、またどちらもおそらく、つねに最善のことを教えてくれたのではない。

したがってわれわれの判断力が、生まれた瞬間から理性を完全に働かせ、理性のみによって導かれていた場合ほどに純粋で堅固なものであることは不可能に近い。

デカルトは、こうした考えが生まれた由来を、身近な作品や過去の構築物の特徴を捉えて、次のような説明を加えながら語っています。

- ・多くの部品を寄せ集めて作り、いろいろな親方の手を通ってきた作品は、多くの場合、一人だけで苦勞して仕上げた作品ほどの完成度が見られない。
- ・一人の建築家が請け負って作り上げた建物は、何人もの建築家が、本来別の目的で建てられていた古い壁を生かしながら修復に努めた建物よりも、壮麗で整然としている。

- ・はじめは城壁のある村落にすぎなかったものが、時とともに大都市に発達していった古い町は、一人の技師が思い通りに平原に線引きした規則正しい城塞都市にくらべると、ふつうひどく不揃いだ。
- ・いつの時代にも、役人たちが私人の建物を公共の美観に資するよう管理に務めてきたのを考えると、他人の作ったものを基にだけでは、完成度の高いものを作り出すのが難しい、とよくわかるだろう。
- ・半ば未開だったむかし、わずかずつ文明化してきて、犯罪や紛争が起こるたびにただ不都合に迫られて法律をつくってきた民族は、集った最初から、だれか一人の賢明な立法者の定めた基本法を守ってきた民族ほどには、うまく統治されないだろう。

同様に、唯一の神が掟を定めた真の宗教の在り方は、他のすべてと、比較にならぬほどよく秩序づけられているはずなのは確かである。

そして人間界のことで自分が思うことは、むかしスパルタが隆盛をきわめたのは、その法律の一つ一つが良かったためではないということだ。というのは、ひどく奇妙な法律や、良俗に反する法律さえも多かったからだ。そうではなく、それらの法律がただ一人によって創案され、そのすべてが同一の目的に向かっていたからである。

しかし、次のような歴史的事実についての認識も語っています。

- ・町全体を違ったやり方で作り直し、通りをもっと美しくするという目的だけで、町の家屋全部を取り壊してしまうことは見かけられない。しかし多くの人たちが、建て直しのために自分の家を取りつぶさせる。

そればかりか、倒壊の恐れがあったり土台が十分にしっかりしていない時に、取り壊さざるを得ないことはよく見られる。

こうした思索と諸々の歴史的事実に対する考察に基づいて、デカルトはある確信を得ました。それは、一個人が国家を、その根底から全てを変えたり、正しく建て直すために転覆したりして改造しようとするのは、全く理に反しているし、同様に、学問の全体系や、その教育のために学校で確立している秩序を改変しようとするのも理に反している、ということです。

しかしその一方で、デカルト個人としては、その時までに受け入れ信じてきた諸見解のすべてに対して、自分の信念から一度きっぱりと取り除いてみるのが最善だとの確信に

到達していました。

こうすることによって、後になって他のもっと良い見解を改めて取り入れたり、前と同じ見解でも、理性の基準に照らして正しくしてから取り入れることができると判断したからです。

古い基礎の上だけに建設するよりも、また、若い頃に信じ込まされた諸原理だけに、それが真かどうか吟味もせずに依拠するよりも、こうしたやり方によるほうが、はるかによく自分の生を導いていくことに成功すると堅く信じたからです。

こうしたやり方にもさまざまな困難は伴いますが、対応策もありますから、公のごく小さなことを改革する際にも見られる困難とは比べものにならないと、デカルトは受け止めたのでした。

公の大きな組織は、いったん倒されますと再建は至難ですし、単に動揺を受けた場合でも、持ちこたえることさえ困難をきわめます。しかも、その崩壊はきわめて過酷なものにならざるをえないのです。

こうした大きな組織には欠点が多いものですが、そういった状態にあっても、習慣がそれらの欠点を大きく緩和してきたに違いありません。しかも、習慣は知らず知らずのうちに、欠点の多くを避けたり正したりしてきたのです。

思慮分別だけではこれらの欠点に対して、これほどうまく対処することはできなかったでしょう。また、これらの欠点はたいへい、その組織を変革するよりも我慢しやすいものだったのです。

自分の得た確信について説明した後に、デカルトはさらに語り続けています。

公の大きな組織の特性を踏まえて思考したデカルトは、あの騒々しくて落ち着きのない気質の人たちを決して容認できなかったのです。彼らは、生まれからも社会的地位からも、公事を扱うよう要請されてもいないのに、いつも何か新しい改革を頭の中で描かずにはいられないのだと断言しています。

もしも自分のこの著作（方法序説のこと）の中で、こうした愚かさが自分にあると少しでも疑われると考えたら、自分はこの著作の公刊を黙認できなかったと、デカルトは思っていました。

デカルトの計画は、自分の思想を改革しようと努め、自分だけのものである土地に建設

することであり、それより先へ広がったことは一度もありませんでした。自分の仕事が十分に気に入って、ここでその見本をお目にかけるといっても、それを真似ることをすすめたいという気持は無かったのです。

神からもっとゆたかな恩寵を分け与えられた人たちは、さらに高尚な計画を抱くことだろうが、自分のこの計画でもすでに、多くの人たちにとって大胆すぎるのではないかと、大いに危惧していました。かつて信じて受け入れた意見をすべて捨て去る決意だけでも、だれもが従うべき範例とは思えなかったのです。

この勢いに乗ってデカルトはさらに語り続けます。世のなかには、この範例にまったく適しない二種類の精神の持ち主だけから成り立っているようであると。

第一は、自分を実際以上に有能だと信じて、性急に自分の判断を下さずにはいられず、自分の思考のすべてを秩序立てて導いていくだけの忍耐力を持ち得ない人たちです。彼らは、ひとたび、受け入れてきた諸原理を疑い常道から離れる自由を手に入れますと、まっすぐに進むために取るべき小道をたどることができず、一生さまよい続けます。

第二は、真と偽とを区別する能力が他の人より劣っていて、自分たちはその人たちに教えてもらえると判断するだけの理性と慎ましさがありますが、もっと優れた意見を自ら探求することはせず、むしろ、そうした他人の意見に従うことで満足してしまう人たちです。

デカルト自身、今までにただ一人の師しか持たなかったなら、或いは、どんなに優れた学者たちの意見にも常に相違があったことを知らなかったなら、疑いなく第二の部類に入っていただろうと思っていました。

デカルトが学院で学んでいた頃に知ったことは、どんなに風変わりで信じがたいことを想像しようとも、哲学者たちの誰かによって言われなかったようなことは一つもないということでした。

またその後の旅の中で、彼の認識は次のようなものになっていきました。即ち、

自分たちと全く反対の意見を持つ全ての人たちが、それゆえに野蛮で未開だという訳ではなく、それどころか、多くの人たちが私たちと同じかそれ以上に理性を働かせている、というものです。

そしてさらに思考が深まっていったのでした。

同じ精神を具えた同じ一人の人間でも、子供の時からフランス人やドイツ人の間で育てられると、中国人や人食い人種の中でずっと生活してきたのとは、どんなに違った人間になるのでしょうか。

私たちの服装の流行で、十年前に気に入っていて、また十年もしないうちに気に入るかもしれない同じものが、今どれほど突飛で滑稽に見えているのでしょうか。

結局のところ、習慣や実例のほうが、どんな確実な知識よりも私たちが納得させているのです。それにもかかわらず、少しでも発見しにくい真理については、ただ一人の人がそういう真理を見つけ出したと言うほうが、国中の人が見つけ出したと言うより、真らしいと受け止められるのです。そんな訳ですから、賛成の数が多いと言っても何一つ価値ある証拠にはならないのです。

こうしてデカルトは、他の人よりもこの人の意見のほうを採るべきだと思われる人を選びだすことができずに、自分で自分を導いていかざるを得ないことになっていたのです。

そして心に決めたことは、一人で闇の中を歩く人間のように、きわめてゆっくりと進み、あらゆることに周到な注意を払おう、そうやってほんのわずかしき進めなくても、気をつけて転ぶことのないようにしよう、ということでした。

また、以前に自分の信念の中に滑り込んでいた、理性によって導き入れられたのではない意見をすっかり棄てることを始めようとも、思っていませんでした。その前に、十分な時間をかけて、取りかかった仕事の案を練り、自分の精神が達しうる全ての物事の認識に至るための真の方法を探求してからだと考えたのです。

デカルトは、若かった頃にラ・フレーシュ学院に在籍していました。そこで、哲学の一部門である論理学と、数学のなかの幾何学者の解析と代数を熱心に学びました。この3つの学問あるいは技術が、彼の計画に何らかの力をきっと与えてくれると思っていました。

しかし、これらの学問あるいは技術を検討する中で次のことに気が付くのです。

- ・ 論理学は、その三段論法も他の大部分の教則も、未知のことを学ぶのに役立つのではなく、むしろ、既知のことを他人に説明したり、スコラ哲学者ルルスが考案した論理的方法のように、知らないことを何の判断も加えずに語るのに役立つだけだ。

実際、論理学は、真実で有益な多くの規則を含んではいるが、中には有害だったり

余計だったりするものが多く混じっていて、それらを選び分けるのは、まだ下削りもしていない大理石の塊からダイアナやミネルヴァの像を彫り出すのと同じくらい難しい。

- ・古代人の解析と今の人たちの代数は、両者とも、ひどく抽象的で何の役にも立たないことにだけ用いられている。そのうえ解析は常に図形の考察に縛り付けられているので、知性を働かせると、想像力をひどく疲れさせてしまう。
- ・代数では、ある種の規則とある種の記号にやたらにとらわれてきたので、精神を培う学問どころか、かえって精神を混乱に陥れる錯雑で不明瞭なものになってしまった。

以上のような理由からデカルトは、この3つの学問の長所を含みながら、その欠点を免れている他の方法を探求しなければならない、と考えました。彼の頭に浮かんでいたのは、法律の数がやたらに多いとしばしば悪徳に口実を与えることになり、ごくわずかの法律が遵守される時のほうが国家はずっとよく統治される、ということでした。

同じようなことが論理学にも言えると彼は思ったのです。そして、論理学を構成しているおびただしい規則の代りに、一度たりともそれからはずれまいという堅い不変の決心をするなら、次の4つの規則で充分だと信じたのです。

第一は、自分が明証的に真であると認めるのでなければ、どんなことも真として受け入れないことです。言葉を換えて表現すれば、注意深く即断と偏見を避け、疑いをさしはさむ余地の全くないほど明晰かつ判明に精神に現れるもの以外は、何も自分の判断の中に含めないことです。

第二は、自分が検討する難問の1つ1つを、できるだけ多くの、しかも問題をよりよく解くために必要なだけの小部分に分割することです。

第三は、自分の思考を順序に従って導くことです。即ち、最も単純で最も認識しやすいものから始めて、少しずつ、階段を上るようにして、最も複雑なものの認識にまで上っていき、自然のままでは互いに前後の順序がつかないものの間にさえも順序を想定して進むことです。

第四は、全ての場合に、完全な枚挙と全体にわたる見直しをして、何も見落とさなかったと確信することです。

幾何学者たちがつねづね用いる、きわめて単純で容易な推論の長い連鎖は、どんなに難しい証明も達成してしまいます。このことがデカルトに、次のようなことを思い描か

せることになりました。

- ・人間が認識しうる全ての事柄は、同じやり方でつながり合っている、真でないいかなるものも真として受け入れることなく、1つのことから他のことを演繹するのに必要な順序をつねに守りさえすれば、どんなに遠く離れたものにも結局は到達できるし、どんなに隠れたものでも発見できる。

デカルトは既に、こうしたやり方で始める場合には、最も単純で、最も認識しやすいものから始めるべきことを知っていましたから、どれから始めるべきかを決めるのに大して苦勞することはありませんでした。

即ち、それまで学問の真理を探究してきた全ての人びとのうちで、何らかの証明（つまり、いくつかの確実で明証的な論拠）を見出しえたのは数学者だけであったことを考えて、これらの数学者が検討したのと同じ問題から始めるべきことを少しも疑わなかったのです。

もっとも、そこに彼が期待した効用は、精神が真理に専心し、誤った論拠に満足しないよう習慣づけることだけだったようです。というのは、ふつう数学と呼ばれている、あの個々の学科の全てを学ぼうとするつもりはなかったと、彼自身が述べています。

注. 算術や幾何学だけではなく、当時は天文学、音楽、光学、力学なども、数学と呼ばれていた。

デカルトは、これらの学科が、対象は異なっても、そこに見い出される様々な関係つまり比例だけを考察する点で一致することになることに気付き、これらの比例だけを一般的に検討するのがよいと考えました。

注. 順序関係と量的関係の両方を含めて、関係とか比例とか呼ばれていた。

デカルトは数学的諸学問の間に、対象的差異でなく、順序と量の比例関係を求め、そこから一般的に成り立つ普遍数学を考えていた。

そして検討の際には、そうした比例を自分にいっそう容易に認識させてくれるのに役立つような対象があれば、その中にだけ想定し、しかもそうした対象にだけ限るのではなく、それが当てはまるような他の全ての対象にも、後になっていっそううまく適用できるようにしようと思っていたのです。

そして、こうした比例を認識するために、時にはそれらを一つ一つ別々に考察する必要があり、また時にはただそれらを記憶にとどめ、多くを一度に把握する必要がある

ことに気付きました。方法序説の訳文をそのまま引用してみます。

「比例を個別的にいつそうよく考察するためには、これを線として想定すべきこと。線以上に単純で、線以上に判明にわたしの想像力や感覚に表象できるものはなかったからだ。しかし、それらの比例を記憶に保持し、多くを一度に捉えるためには、できるだけ短い、ある種の記号で示す必要があること。そしてこのようなやり方で、幾何学的解析と代数学とのあらゆる長所を借り、しかも一方の短所すべてをもう一方によって正せる、と。」

デカルトは思い切って宣言しています。これも方法序説の訳文から引用します。

「わたしが選んだこのわずかの規則を厳密に守ったことで、この二つの学科の及ぶどんな問題もきわめて容易に解けるようになり、二、三カ月かけてこれらの問題を検討するうちに、もっとも単純でもっとも一般的なものから始めて、発見したおのおのの真理をさらにほかの真理を見いだすのに役立つ規則としたので、以前たいへん難しいと思っていた多くの問題を解いてしまっただけではなく、しまいには、知らなかった問題さえも、どういうやり方でどこまで解けるかを決定できる、と思われたほどだ。

この点で、次のことを考えていただければ、わたしがそれほど自惚れているとは映じないだろう。つまり、一つのことに一つは一つの真理しかないのだから、その真理を見つける人はだれでも、それについては人の知りうるかぎりのことを知っているわけである。

たとえば、子供が算術を習って、その規則どおりにたし算をすれば、その子供は計算している総和については、人間精神が見いださるすべてを見いだしたと確信してよい。というのも結局、真の順序に従い、かつ求めるもののあらゆる条件を正確に枚挙せよと教える方法は、算術の規則に確実性をあたえるすべてのものを含んでいるからである。」

この方法でデカルトが一番満足したことは、この方法によって、自分の理性をどんなことにおいても、完全ではないまでも、少なくとも自分の力の及ぶ限り最もよく用いているという確信を得たことでした。

そしてさらに、この方法を実践することを通して、自分の精神が対象をいつそう明瞭かつ判明に把握する習慣をだんだんと付けていくのを感じていました。また、この方法を、いかなる特殊な問題にも限定しなかったので、代数学の難問に用いたのと同じくらい、他の学問の難問にも有効に適用できるとの期待も生まれたのでした。

そうは言っても、出てくる難問の全てを検討しようなどという大胆な企てを、初めから持ったわけではありません。そんなことをすれば、彼の決めた規則の定める順序に反することになるからです。

こうした思考を進めていく中で、デカルトは重大なことに気付きました。それは、これらの学問の原理は全て哲学から借りるものであるはずなのに、自分は哲学ではまだ何も確実な原理を見い出していないということです。

それゆえに、自分は、何よりも先ず、哲学において原理を打ち立てることに努めるべきだと考えたのです。そしてそれは、この世界で何よりも重要なことであり、速断と偏見が最も恐れられるべきことだとの認識を持っていましたので、当時23歳だった彼は、もっと成熟した年齢に達するまでは、これをやり遂げようと企ててはならないと考えました。

即ち、その時点より前に受け入れていた悪しき意見の全てを、自分の精神から根絶するとともに、多くの経験を積み重ねて、それが後に自分の推論の材料となるようにし、また自分の定めた方法を絶えず修練してますますそれを強固にし、予め十分な時間を準備のために費やした上でなければ、その企てに乗っていくことはできないと考えたのです。